飯島賢二の『恐縮ですが･･･一言コラム』

第 36 回　　マスコミよ、下劣な「デバ亀」主義はやめよ！

どうでもいい事なんだけど、無性に腹が立つのが「田中真紀子長女、文春事件」なるものである。腹が立つのは二つ。一つは「週刊文春」に限らないが、いわゆるマスコミと称する連中の、驕りと下劣な「**デバ亀**」主義と、それをあたかも民主主義の砦と言わんばかり、擁護し続ける、無節操な文化人ども、救いようのない「インテリ」馬鹿が、未だに大きな顔をしている現状に腹が立つ。そしてもう一つ、東京高裁の判断の無責任さ…、社会の末端で生きている小生如き小市民が、何をかいわんや…かも知れないが、いやいや、腹立たしいだけの話である。

マスコミと称する中には、個人のプライバシーや、タレントの「好いた惚れた」を暴いて「スクープ」と喜んでいる、教養の欠片もない輩が横行する。嘗ての日本人的美学から言えば、他人の恥部を覗き見て喜ぶ、最も下劣な行為と卑しまれ，「**デバ亀**」と呼ばれ、誰からも軽蔑されたものである。そんな現象に面白がる白痴化した国民に支えられ、何と、「**デバ亀**」記者の多いことか…もう、いくら小生が怒ったり、嘆いたり、そんな状況をとっくに超越してしまった。イタリアのパパラッチと、なんら変わらない社会を、日本の、言論の自由を標榜する立派なマスコミ人が，見事に創り上げた。ご愁傷様である。

東京地検の出版禁止の仮処分を命令した大橋裁判長、色々な論議は呼んだが、彼なりの判断があった。東京高裁は、複数の合議制で決まるとはいえ、あの判決は、何と理解したらいいのか、「どっちでもいいんジャン」ともとれる、双方の言い分を、ただ形式的に述べたものであり、従って、うまくおさまった？かも知れないが…、いかにも、現代日本人の思想構造を代弁したかの如き、中途半端な、いい加減なものとしか思えない判断だった。

毎日、マスコミの社会で汗を流している記者達、明日の日本造りの為に、真に、頑張って欲しい。益してや「文春」と言えば菊池寛を連想する、我国きっての言論的オピニオンリーダーであり、記者達には「文春プライド」があった筈。芸能レポーター的チンケイかつ下劣なことに、社力をかけないで頂きたい。インターネットまで活用して「小誌はなぜ報じたか」なる弁解サイトを読むにつけ、「文春のプライド」は何処へいったのか…、実に嘆かわしい次第である。ご都合主義の個人情報保護は、もうたくさん。

しかも、その裏に、「売れればいいや」的儲け主義イズムが見えてしまった時、本当にマスコミの危機が来る。今ならまだ、間に合うから、少し考えて欲しいものである。あまり、読者（言い換えれば日本国民）を、馬鹿にしてはいけない。国民は、あなた達が思っているより、もう少し賢いはずである。「ペン」による第三の権力、決して、無節操に許してはならない。